

2023年6月11日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 1 「ただ一つの慰め」

申命記7：6～8、ローマ14：7～9

本日より2回目となる『ハイデルベルク信仰問答』の講解説教を始めます。前回のハイデルベルクの説教は2011年8月から1年ほどかけて読みました。ホームページにその説教が掲載されていますが、先日、当時の説教を懐かしく読み返しておりました。その説教を開始した2011年は3月に東日本大震災がありました。また個人的なことでしたが、その翌年に父を御許に送りました。そのように12年前も様々な試練がありましたが、今はコロナや戦争で人々は深く傷ついています。熊本にいるわたしたちにとってはこの12年の間に熊本地震を経験しました。豪雨水害もありました。個々の歩みにおいても悲しみや試練を経験しています。それは時間が解決してくれるのでしょうか。仕事や趣味に没頭することで忘れるのでしょうか。人間は単なる気休めではなく本当の慰めを必要としています。その慰めをこの説教を通してもう一度確認していきたいと思います。

問1では「生きるにも死ぬにも」と繰り返されます。結局、人間の生涯は、生きることと死ぬことに集約されます。どう生きるか、どう死ぬか、それが人生の一番の問題なのです。生きることは大変です。特に今の時代、コロナ禍を経験して、ますます生き辛さを感じている人も多いのではないのでしょうか。日々の生活、仕事のことや家族のこと、人間関係、健康のこと、将来のこと、悩みは尽きません。考えてしまうと不安で眠れない人もいるでしょう。そして死の問題があります。誰もが死を迎えますが、しかしいざ自分のことになった時に、これと向き合えるのだろうかと思います。家族が、自分自身が死を迎える。病気になって、身近に死を感じる。その時に冷静にこれを受け止めることができるだろうか。すべてを手放さなくてはならないその死の間際に一体自分は何を思うのだろうか。

そういう生きること、死ぬことに恐れや不安を抱くわたしたちがこのただ一つの慰めさえあればそれで十分慰められるとこの信仰問答は語ります。「慰め」という言葉は元の言葉では「抛り所」です。そういう生の問題、死の問題にもすべてに通用する抛り所がある。それがあから勇氣を持って生きることができる。それがあから確信を持って死ぬことができる。そういう人生の抛り所が与えられている。それが「イエス・キリストのものであること」です。この人生が他の誰のものでもない。わたし自身のものでもなく、イエス・キリストのものである。その一点でわたしたちの生の問題、死の問題はもう解決しているのです。

「キリストのものである」とはどういうことでしょうか。やはり人生の問題はどこかでわたしたちは「自分のもの」と考えています。最後まで自分が責任を持たなければならない。自分が解決しなければならない。でも果たしてそうでしょうか。人生の問題はどれも大きく、とてつもなく重く、自分ではどうすることもできないものばかりです。それを背負って生きていくのは本当にしんどいことだと思う。いっそ死んでしまった方がどんなに楽かと思うこともしばしばでしょう。でもその人生の重荷を丸ごと引き受けてくださるお方がいるとしたらどうですか。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11：28)と言われるお方がその重荷を引き受けてくださる。それが「キリストのもの」ということです。わたしの人生の問題を全部キリストのものとして引き受けてくださった。それが次に続く言葉に表されています。

「この方は御自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました」ここにキリストの十字架の贖い、罪の赦しがあります。罪はすべて清算されるということ。だからもはや神さまから責められることはありません。その救いをもうすでに神さまは与えてくださっております。そして「また天にいますわたしの父の御旨でなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです」これは現在の状態と理解できます。このキリストの救いに今わたしたちは招かれ、これに守られているのです。人生の良いことも、悪いことも、「万事」すべてがこの救いのために働くのです。そして「また、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜び、またそれにふさわしくなるように、整えてもくださる」これは将来の救いの保証です。この人生がすべて贖われて、御前にふさわしく整えられていく。新しく造り変えられていく。聖霊がそのようにわたしたちの人生を完成へ導いてくださいます。そういう希望があります。

人生の問題を神さまが過去、現在、将来に渡って、初めから終わりまで責任をもってくださる。だからわたしたちは安心して神さまに預けたらいい。自分のものだから自分で解決しようと思わなくていい。もう既に神さまが父、子、聖霊を総動員して、わたしの人生を御自分のものとしてしっかりと握りしめてくださっている。それがわたしたちの本当の慰め、拠り所なのです。

昨夜NHK スペシャルを観ました。認知症の妻とその夫の話でした。夫が教会の牧師でもあったのでより親しみを持って観ました。特にコロナ禍の三年は面会ができず、病状も進行して、家族は様々な葛藤があります。おそらく同じ思いを抱えている人はたくさんおられるでしょう。わたしも自分のこととして観ました。もちろん病気が治ることはありません。確実に身体は衰えていきます。家族のこともわからなくなる。でもそのありのままを受け止めていく姿に清々しく爽やかな気持ちになりました。これまでは相手に期待している自分がいました。「自分だとわかってほしい」「笑顔を見せてほしい」それが叶わなくなることには苛立ち、辛くなる。でもあなたがわからなくなってもわたしがわかっているからいい。あなたが忘れてしまってもわたしが忘れないからいい。そのままでもいい。そういう受け止め方へと変えられていく。それが「キリストのもの」とされた、人生の重荷を主に委ねた人の生き方なのだと思います。

天の父よ。背負いきれない人生の重荷を、あなたがキリストを通してご自分のものとしてくださる幸いを感謝いたします。どうぞ人生のすべてがキリストのものとされることの慰めを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。